

鳥インフルエンザ治療薬の国際共同研究

実施機関：京都大学（研究代表者：萩原 正敏）

実施期間：平成 21～23 年度

プロジェクトの概要

ベトナムでは現在も、旧来の日本の農家のように家禽は人家と近接して飼育されているため、ヒトへの感染例もインドネシアと並び世界最多で、高病原性鳥インフルエンザの脅威は現実となりつつある。研究代表者らが東京医科歯科大学で開発した抗ウイルス薬は、宿主細胞の蛋白リン酸化酵素を標的とし、鳥インフルエンザウイルスに対しても効果が期待できるので、両国の研究者が協力して開発を推進し、次世代研究者の組織的交流を促し、最新の創薬技術の普及と研究者育成を図る。

(1) 評価結果

総合評価	目標達成度	成果	計画・手法の妥当性	実施期間終了後における取組の継続性・発展性
A	b	a	a	a

総合評価：A（所期の計画と同等の取組が行われている）

(2) 評価コメント

機関が有するケミカルバイオロジー及びリン酸化酵素に対する高い研究ポテンシャルを活かし、新薬開発につながる事業が推進されたと評価できる。ベトナムにおけるウイルス感染実験の実施体制を整備するため、人材の育成に力をいれて緊密な連携ネットワークが構築されたことは、形成した拠点の継続性を確保するものとして評価できる。今後、ベトナムとの連携による創薬に向けた本取組みの発展的な展開を期待する。

・**目標達成度**：鳥インフルエンザ治療薬の開発に向けた研究及びベトナムにおける創薬研究者の育成は、所期の計画通り実施され、目標を達成したものと評価できる。しかし、所期の計画に含まれていた鳥インフルエンザを用いたベトナムにおける *in vivo* での評価試験は、安全性確保のため、実施準備に時間を要しており、プロジェクト全体として、所期の目標をやや下回る目標達成度と評価できる。

・**研究成果**：本プロジェクトにおける研究シーズが、鳥インフルエンザのみならず RNA ウイルス全般に有効であることが示され、新たなタイプの抗ウイルス薬の開発につながる可能性のある成果が得られていることは評価できる。

・**計画・手法の妥当性**：作用機序解明等の基盤研究は順調に進められたが、*in vivo* での感染試験の実施に遅れが出るなど、当初の予定と異なる部分があった。しかし、他の安全性の高いウイルスを用いた動物感染実験系により、感染抑制作用の確認を行う等、代替する適切な対応が図られていることは評価できる。また、今後の展開を確実にするため、ベトナム政府系関係研究機関との連携を新たに確保するなどして、鳥インフルエンザを用いた有効性評価の実施体

制整備も行われており、妥当な計画・手法と評価できる。

- ・ **実施期間終了後における取組の継続性・発展性**：鳥インフルエンザを用いた in vivo 評価試験実施に向けて必要な研究体制がハノイ医科大学で整えられるなど、発展的に開発を継続する基盤が形成されていることは評価できる。今後、積極的に推進されている研究者の育成を含めて、さらなる展開を期待する。